

リュケイオンにおける教育とアテナイ社会

坂本千春*・池谷文夫**

(2009年11月30日 受理)

Education of the Lyceum and Athens Society

Chiharu SAKAMOTO* and Fumio IKEYA **

(Received November 30, 2009)

Abstract

Lyceum, which was established by Aristotle in the 4th century B.C., was the opened school that gave many lectures for citizens. For verification, I compared Lyceum with Academy established by Plato in order to explain the role of Lyceum in the society at that time. Consequently, it proved to be the school that combined good points of classic philosophy in Academy with those of practical science which was famous for Sophist. In the 4th century B.C., both political and social organs in Athens had changed much. In that situation, Lyceum was hailed by the citizens through its own educational practice without protection by Polis.

はじめに

リュケイオンは、紀元前4世紀にアリストテレスがアテナイに開いた、いわゆる高等教育の場である。一般にペリパトス派（逍遙学派）とも言われるこの学園は、学園外の一般の市民にも講座を開講するなど、開かれた学園としての性格を有していた。また、リュケイオンの学生たちはアリストテレスの指示のもと各地に赴き、膨大な資料を収集したことで知られる。その結果、今日の我々が目にする、あの数多くのアリストテレスの著作を生みだした。

従来、アリストテレスの研究はさまざまな分野にわたって数知れずあるにもかかわらず、彼の学園であるリュケイオンの研究はさほど多くない。歴史学の分野においては、藤縄謙三（1975）が初期の哲学者からストア派までの知識人の経済生活を社会史の面から考察している¹⁾。思想学では、

*福島県立双葉翔陽高等学校（〒960-1152 双葉郡大熊町大字下野上字原1；Futaba-shoyo Senior High School, Fukushima 979-1308 Japan）

**茨城大学教育学部外国史研究室（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；Seminar of Foreign History, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）

廣川洋一（1980）がアカデメイアをプラトンの時代からローマ時代までの学園の実態を論じている²⁾。加えて同（1984）は、アカデメイアやリュケイオンと相反する、イソクラテスの修辞学校における教育についても研究している³⁾。リュケイオンを取り上げた研究としては、Lynch（1972）が挙げられる。Lynchもまた、アリストテレスの時代からリュケイオンが衰退する6世紀までの長期間にわたって考察している⁴⁾。

他方で、近年、アリストテレスに対する評価が見直されてきている。例えば、教育学ではイェーガーが「ギリシアの教育史上、アリストテレスは一般に認められている以上に重要な位置を占める」と発言し⁵⁾、アリストテレス思想がヒューマニズムに影響を及ぼした点を指摘した。また、倫理学の面でもクラウトらに代表される英米の文献的調査から端を発し、バーニェト（1986）にみられるように道徳性に関する教育の役割が注目されている⁶⁾。

以上から近年のアリストテレスの再評価を踏まえたうえで、実践教育の場であったリュケイオンも見直す必要があると考える。そこで本研究では、リュケイオンの黄金時代といわれる初代学長のアリストテレスならびに第2代学長のテオフラストスの時代に焦点を当てる。その際、アカデメイアと比較検討し、よりリュケイオンの性格を際立たせる。アカデメイアをリュケイオンの比較校に選択した理由としては、次の3点を挙げる。第1に、アリストテレスがアカデメイアで20年近く学んだ学園であったにもかかわらず、結局は袂を分かったことである。第2に、両学園の創設者であるプラトンとアリストテレスがともにソフィストとは一線を画す、ソクラテスの精神を受け継いだ哲学者であり、両者の学風が引き継がれた学園であったことである。そして第3に、アテナイにおいて、プラトンは市民であったのに対し、アリストテレスは非市民という社会的身分の相違からである。

これらの3点を軸に、リュケイオンが当時のアテナイ社会に果たした役割を考察し、古代ギリシアにおける教育と社会との関連性に迫りたい。

第1章 アリストテレスとリュケイオンを取り巻く社会

第1節 アリストテレスとマケドニア

アリストテレスは、紀元前384/3年にカルキディケ半島のイオニア人の植民都市であったスタゲイロスに生まれた。彼の生家は代々マケドニア王に仕える医師であり、父親のニコマコスもアレクサンドロスの祖父にあたるアミュンタス3世に仕えていた。したがって、アリストテレスは幼少時代、マケドニアの王宮にしばしば出入りしていただろう。ニコマコスは、アリストテレスが幼い頃に亡くなったと言われる。その後、後見人として彼らの面倒を見るのがプロクセノスであった。プロクセノスはアリストテレスの母方の叔父とも義兄とも言われる。彼は生まれ故郷のアタルネウスにアリストテレスを連れて行き、そこで教育を施したと言われる。しかし、どのような教育が施されたかは明らかではない。その後、17歳に達した紀元前367/6年に、アリストテレスはアカデメイアに入学することになる。

紀元前347年、アリストテレスはそれまで20年近く学んだアカデメイアを突如去ることになる。このことに関しては第2章で述べるが、その1つにアテナイで反マケドニア旋風が起こっていたことが挙げられる。アリストテレスは難を逃れるために、小アジアのアッソスへ赴く。この地はアカ

デメリアと親交のあったヘルミアスが治めており、彼がアテナイの状況を酌んでアリストテレスを招いたのである。しかし紀元前 345/4 年にアッソスがペルシアに攻撃されると、アリストテレスはレスボス島のミュティレネに移った。この地でリュケイオンの第 2 代学長となるテオフラストスと親交を深め、生物学の研究に取り掛かることとなった。

その後、紀元前 343/2 年にマケドニア王フィリッポス 2 世に招かれ、アレクサンドロスの家庭教師となる。この背後にはフィリッポス 2 世とヘルミアスに親交があったこと、また幼少時代のアリストテレスとフィリッポス 2 世が顔なじみであった可能性もある。フィリッポス 2 世は皇子の教育に非常に力を注ぎ、アリストテレスを厚遇した⁷⁾。どのような教育カリキュラムが組まれたかは不明だが、アレクサンドロスは遠征の途上でよくイリアスを口ずさんだというエピソードがある⁸⁾。このことから、実践的な教育よりは基礎的な教育を行ったことが窺える。アリストテレスとアレクサンドロスの師弟関係はわずか 2 年ほどであったが、その後もマケドニアとアリストテレスの親密な関係は続いた。

カイロネイアの戦いの勝利によって、ギリシアにおけるマケドニアの覇権が確立した後の紀元前 335 年、アリストテレスはアテナイに戻りリュケイオンで研究と教育に力を注いだ。この翌年、アレクサンドロスが東方遠征に出発した。彼の遠征には学者も含まれており、その中にはアリストテレスの縁者であるカリステネスもいた。しかしアレクサンドロスが急死すると、アテナイの状況も一変した。再び反マケドニアの機運が高まり、アリストテレスもマケドニアとの関係から攻撃の対象となった。そのため彼は、母親の故郷であるカルキスに避難し、その 1 年後の紀元前 322 年に生涯を閉じた。

第 2 節 アテナイ市民とマケドニア

紀元前 4 世紀のアテナイは全盛期に完成した民主政が崩壊し、混乱に満ちた時代であった。ペロポネソス戦争敗北後、アテナイは一時期民主政が途切れたが紀元前 403 年は復活した。しかし全盛期のような輝きは戻らず、その後もギリシアの覇権をめぐる、アテナイはテーベ、コリントス、アルゴスと連携してスパルタとの間にコリントス戦争を起こした。この戦争後、ギリシアで力をつけ始めるのがエパミノンドスの率いるテーベで、アテナイはその影に追いやられる格好となった。

一方、紀元前 359 年にフィリッポス 2 世がマケドニア王になる。彼の下でマケドニアは国制を整え、ギリシアへの侵攻を狙っていた。フィリッポス 2 世が王に就任してから 2 年後に、第 2 次アテナイ海上同盟の同盟市戦争⁹⁾が始まった。またフィリッポス 2 世がアンフィポリスを征服し、アンフィポリスと同盟都市関係にあったアテナイがマケドニアに宣戦した。この第 3 次神聖戦争は紀元前 346 年のフィロクラテスの和約により、アテナイとマケドニアの交戦状態に終止符が打たれた。澤田 (1993) は、従来アテナイとの友好関係を重視したこの和約を、フィリッポス 2 世によるギリシア征服の足がかりとして位置づけた¹⁰⁾。さらに、フィリッポス 2 世がギリシア征服に関心を抱いた根拠を物質的な側面ではなく精神的側面、つまり自らもギリシア人であることに求めている¹¹⁾。そのため、当時の文化の中心地であったアテナイで学んでいたアリストテレスに息子の教育を依頼したとも考えられる。

その後フィリッポス 2 世はかねての計画通りギリシア支配に乗り出し、カイロネイアの戦いでギリシア軍を破った。その翌年マケドニアの指導下でコリントス同盟が結成され、アテナイは完全に

マケドニアの支配下に入ることとなった。この頃のアテナイの政治家は、マケドニアに対する2つの考えに分かれて対立し、市民たちも確固とした意見を持たず状況によって変化していた。親マケドニア派の代表としてはイソクラテスが、反マケドニアの代表としてはデモステネスが挙げられる。デモステネス率いる反マケドニア派はマケドニアとの関係がある人物を弾圧したので、紀元前348年の政権獲得の際にアリストテレスはアカデメイアを去り、遍歴の旅に出かけた。

コリントス同盟が結成されマケドニア支配の下で社会が安定したのもつかの間、アテナイでは2度の大規模な反マケドニア運動が起こる。1度目は、フィリッポス2世が暗殺された紀元前336年に起こった。この混乱はアレクサンドロスによって収拾された。だがアリストテレスがアテナイに戻ってきた紀元前335年も、決して良い状況ではなかった。2度目は紀元前323年、アレクサンドロスがバビロンで急死した際に起こった。アレクサンドロスの突然の死に対する反響は大きく、アテナイだけでなく、ギリシア諸市がマケドニアに対してラミア戦争を引き起こした。このときもまた、アリストテレスはアテナイを離れ、カルキスへ移住した。

カルキスへ移った翌紀元前322年にアリストテレスが亡くなったが、この年はアテナイにとっても大きな転換点となった。つまり、それまで築き上げてきた民主政が停止したのである。今回は以前と異なり、短期的なものではなかった。リュケイオンもテオフラストスがアリストテレスの後を継いでおり、政治・学園ともに新しい時代を迎えることとなった。

第3節 リュケイオンとマケドニア

リュケイオンとマケドニアの関係は、アリストテレスの生涯からも分かるように切っても切れない関係にあった。ときにはその関係から、政治的弾圧を受けることもあった。しかし、リュケイオンが学園として存続できたのもまたマケドニアのおかげであった。

藤岡謙三（1985）は、リュケイオンがその資金面の多くをマケドニア系の権力者から受け取って実証的な学問を研究しており、この経済的援助を失った後その地位をアレクサンドリアに取って代わられた¹²⁾、と指摘している。確かにアリストテレスは、マケドニア王室だけでなくその摂政であったアンティパトロスとも親密な付き合いをしていた。このことは、アンティパトロスがアリストテレスの遺言状の執行人であった¹³⁾ことから分かる。リュケイオンが年間どの程度の援助をマケドニアから得ていたかは定かでないが、学園の運営資金を考える上でも、また当時のマケドニアの豊かな財政からも、相当の額を受け取っていたと見るのが妥当であろう。

このようにマケドニアの圧倒的な財政面での援助を受け、それを生かした実践的な教育や研究が行われたが、問題点もあった。それは不動産所有に関する問題である。アリストテレスもテオフラストスもアテナイ市民ではなく在留外人¹⁴⁾の身分にあったため、アテナイでの不動産所有は認められていなかった¹⁵⁾。しかし実践学を重視していたことから、その資料は年々増え続けたものと考えられる。それに伴い施設の拡大を望んだだろうが、リュケイオンが公共施設であったことから、独占することは困難であった。しかしながら土地を所有できないために、新たな建物をリュケイオンの近くに建てることもできなかった。

アテナイ市民以外の人物が土地を持つ唯一の手段とも言えるのが、エンクテーシスという制度であった。これは特別にポリスの功労のあった在留外人に不動産所有を認めるもので、紀元前5世紀頃から現れた。紀元前4世紀前半まではエンクテーシスの付与は少なかったが、後半になると頻繁

に行われるようになる。馬場恵二（1962）によると、エンクテーシスの付与は当該者に不動産所有の権利を認めることであって、ポリスが彼を不動産所有者に転化させることではない。また、エンクテーシス享受者は一般市民との私的な契約関係を通して土地所有の実現を計らなければならない¹⁶⁾、とも指摘する。つまり、エンクテーシスを与えられた者が不動産所有を望む場合には、市民とのコネクションが必要となる。アリストテレスやテオフラストスが生きた時代はまさに、エンクテーシス付与に変化が生じる紀元前4世紀であり、これに関与する可能性も十分にあった。

それはテオフラストスが学長を務めていたときに起こった。彼の下で学んだアテナイ市民のデメトリウス¹⁷⁾が、マケドニアとの共同統治の下、アテナイで政治家として実権を握った。彼は師匠のテオフラストスにエンクテーシスを用いて、庭園を贈った¹⁸⁾。この庭園はリュケイオンの近郊に設けられ、テオフラストス個人の財産とされた。このことに関して Lynch（1972）は、テオフラストス時代にはより広大な施設が研究や教育に用いられていたとしている¹⁹⁾。彼の指摘のように、この庭園内にリュケイオンの施設を造り、研究その他に役立てたとみなすのは想像に難くないと言える。

以上のように、マケドニアはリュケイオンに資金面での援助は勿論のこと、その後の政治支配の中でリュケイオン出身の者に政治支配を委任したこと、それに伴う学園の敷地の拡大といったさまざまな面で支援した。また、この支援に対してリュケイオンが十分応えるだけの成果を出していたことも背景にあったと考えられる。

第2章 リュケイオンとアカデメイア

第1節 アリストテレスとアカデメイア

（1）アリストテレスの思想動向をめぐる論争

アリストテレス研究にとって、20世紀のイェーガーの発展史の見解にたつアリストテレス像は、その後大きな波紋を生んだ。

イェーガーは、アリストテレスの哲学思想は3つの発展段階の時期に区分されるとした。第1時期はアカデメイア在学中で、プラトンの教説に忠実であった時代である。第2時期は遍歴時代で、この時期から次第にプラトンの思想を離れ、独自の思想を形成発展させた。そして第3時期はリュケイオン学園時代で、科学的研究や実証的な研究が行われた²⁰⁾。つまり、アリストテレスの思想は当初は強かったプラトンの影響が次第に薄れ、独自の思想が確立したという発展段階が組み立てられている。

このイェーガーの説に対する疑問が、1950年代半ば頃から生じた。その中でも、デューリングの説はイェーガーの説を大幅に修正するものであった。デューリングは、アリストテレスの思想はその初期の頃から晩年にいたるまで一貫性があることを主張した²¹⁾。すなわち、アリストテレスはアカデメイア在学中から既に独立した思想家であり、プラトンとは一線を画していたことになる。廣川（1980）は、今日でもイェーガーの説は有効な点を多数含んでいるが、アカデメイア在学中のアリストテレス像については修正されなければならないとする²²⁾。

以上の見解を踏まえ、アリストテレスのアカデメイア在学期間とリュケイオン開校時について以下考察する。

（2）アカデメイアでのアリストテレス

アリストテレスがアカデメイアに入学した紀元前367年は、プラトンが2度目のシチリア旅行²³⁾へ出かけた年でもあった。プラトンの旅行の目的は、かつての教え子であったシチリアの実力者であるディオンの希望、すなわち新しい僭主であるディオニュシオス2世を再教育してほしいとの願いに応えるためであった。プラトンは、さらに紀元前361年にもシチリアに出かけている。したがって、アリストテレスがアカデメイアで学んでいた約20年のうち、議論できた期間はほぼ3年であった²⁴⁾。よってアリストテレスは、アカデメイアで過ごした時間は長くプラトンの弟子であることに間違いはないが、直接の影響をさほど受けなかったと考える。

むしろアリストテレスが影響を受けたのは、エウドクソスであった。エウドクソスは、プラトンの第2回シチリア旅行の際、学長代理を務めていた人物である。彼は、幾何学・天文学・医術・法律に卓越していた²⁵⁾。アリストテレスは、エウドクソスを学問面でも人格の面でも尊敬していた²⁶⁾。この人物の下で、アリストテレスは幾何学をはじめとする基本的な科目は勿論、実践的な分野である医術もおそらくは興味を示し学んだであろう。この経験は、アリストテレスがアカデメイアでの学生生活の後期に、生物学研究を行う上での礎となった。

つまり、アリストテレスがアカデメイアで過ごした期間で影響を受けたのは、プラトンというよりはむしろエウドクソスであった。では、アリストテレスとプラトンとの関係はどのようなものであったのか。この問題について印象的なものは、ディオゲネス・ラエルティオスの伝記である。それによると、プラトンは、「アリストテレスは子鹿が母親を蹴るように、私を蹴る」²⁷⁾、と言ったとある。これに関連して、プラトンが病に付しているところにアリストテレスが訪れ、議論を戦わせたというエピソードもある²⁸⁾。

これらにみられるアリストテレスとプラトンの関係は、決して良いとは言えない。しかしアリストテレスは、アカデメイア内のプラトンの著作を読み、特に『パイドン』に深く影響を受けたという²⁹⁾。またアカデメイアでは、学長を含め学生の共同体としての性格が強く、学長に対して学生が自らの意見をぶつけることは何の問題もなかった。アリストテレスがプラトンに対して議論を持ちかけるときにはプラトンの説を批判したとしても、それは学問への探究心からくるものであって、個人的な感情のものではなかったと考える。「アリストテレスにはたずなが必要である」³⁰⁾というプラトンの評価からも、アリストテレスの勉学に対する積極性が窺える。このようなアリストテレスの行動の背景には、プラトンが学園を空けていた期間が長く、直接話し合う機会が少なかったことがある。

以上のことから、デューリングが指摘したように³¹⁾、プラトンとアリストテレスの考えの違いは、アリストテレスがアカデメイアで学んでいた時代に生じていたと言える。

（3）リュケイオンの開校

アリストテレスがリュケイオンを開くにあたり、2つの疑問が生じる。1つは、なぜアリストテレスがアカデメイアを突如去ることになったのかについてである。もう1つは、リュケイオンをどのような形で開校したかについてである。

まず、アリストテレスがアカデメイアを去りアッソスへ移った要因として、次の2つの説がある。1つは、プラトンの後継者をめぐるとの問題である。プラトンの死後、第2代学長となったのはアリストテレスではなくスペウシッポスであった。アリストテレスは、当時の学園内での実力からいって

最有力候補であったが、自らよりも秀でていたとは評価されていなかったスペウシッポスが選ばれたことに反感を覚え、学園を去った。この説では、アリストテレスがプラトンの死後にアカデメイアを去ったとする³²⁾。

もう1つは、アリストテレスが学園を去ったのは、アテナイにおける反マケドニアの動きであるとする説である³³⁾。紀元前348年に、マケドニアのフィリッポス2世がカルケディケ半島を攻略しオリュントスを陥落させたために、アテナイで反マケドニアの機運が高まった。この翌年に反マケドニア派のデモステネスが政権を握り、紀元前340年にはマケドニアに宣戦することになる。したがってこの時期のアテナイは、マケドニアに関係のある人物にとって非常に住みにくかった。この政治状況を考慮して、プラトンの存命中にアリストテレスはより安全な場所に移った。

この2つの説のうち、廣川や堀田が指摘する³⁴⁾、アリストテレスがアカデメイアを去ったいきさつと晩年リュケイオンからカルキスへ逃亡するいきさつの類似点や、アリストテレスとプラトンの関係を踏まえると、後者の方がより説得力があると考えられる。また今日では、アリストテレスがアテナイを離れたのは、プラトンの死の10ヶ月ほど前である、紀元前348年の初秋であるとする説が有力である³⁵⁾。つまり、アリストテレスはアテナイにおける自身の立場上、アカデメイアを去らざるをえず、その時期もプラトンが亡くなる前の出来事であったと言える。

次に、リュケイオンの開設をめぐる2つの説を考察する。1つは、アカデメイアとの関係は良好でアカデメイアの分校の形をとった説である³⁶⁾。もう1つは、アリストテレスがアテナイのためにマケドニアへ外交に出かけた際、アカデメイアの第3代学長がクセノクラテスに決まったため、リュケイオンに学園を開くことになったという説である³⁷⁾。

このどちらも不明瞭であるが、アリストテレスがアカデメイアを離れてから再びアテナイへ戻ってくるまでに、アカデメイアの関心とは相容れない考えになったという可能性³⁸⁾、アカデメイア在学中から実践的な学問に関心を示していた点、さらに学園を開校できるほどの哲学者としての名声があったことを総合すると、アカデメイアとは別の学園を開校しようとしたのも当然の成り行きであったと考えられる。したがって、リュケイオンはアカデメイアの分校ではなく、独自の考えに基づく学園として、紀元前335年に開校されたと見なすのが妥当である。

第2節 リュケイオンとアカデメイアの共通点

(1) 学園組織面での共通点

アリストテレスは前述したように、アカデメイアで長期間にわたって学んでおり、自らの学園を開く際に母校を参考にした。特に、公共施設の利用とシュンポンシオン（共同食事）について、アリストテレスはアカデメイアの方式を模倣した。

公共施設の利用については、アカデメイアもリュケイオンも、ギムナシオンを長期にわたって利用した学園であった点で共通する³⁹⁾。ギムナシオンを利用することについては、他の哲学者も行っていたので特別なことではなかったが、何代にもわたって学園を存続させたのはアカデメイア以降であった。その点で、アカデメイアの学園としてのあり方は当時としては画期的なものであった。加えて、両学園共に学園が組織面で完成するまでには時間がかかった。アカデメイアは、第3代学長のクセノクラテスの時代に、リュケイオンは第2代学頭のテオフラストスの時代に完成したと言われる⁴⁰⁾。

ギムナシオンはアテナイの城壁外に置かれていたため、敵の侵入や包囲による危険をはらんでいた。紀元前4世紀を通じて、アテナイは何度も戦禍に見舞われ、その都度ギムナシオンも損傷を受けた。このような負の部分を抱えつつも、ギムナシオンが持つ環境、設備の良さがアカデメイアやリュケイオンを存続させる要因であった。

シュンポシオンについては、両学園共に定期的に行われていた。そもそもシュンポシオンは、「共に飲むこと」を意味し、食事よりも酒盛りに力点をおいた饗宴であった。アカデメイアで行われていたシュンポシオンは質素なものであったのに対し、リュケイオンにおけるシュンポシオンは豪華なものであったといわれる⁴¹⁾。この宴会では単なる飲食にとどまらず、酒を酌み交わしながらの哲学談義を行う一種の教育の場でもあった。

シュンポシオンを催すのは、両学園ともにアルコンの役割であった。ここでのアルコンは、いわゆる学生代表者であり、年長者の学生が交代で行っていた。アカデメイアでは10日おきに、リュケイオンでは30日おきに変わっていた。アルコンは、費用を全負担することはなかっただろうが、会場の準備や来客の接待等の雑用をこなしていただろう。シュンポシオンに参加していたのは、21歳以上の青年であったと考えられる⁴²⁾。また、「アカデメイアの食堂には集うものは28人であった」⁴³⁾ということから、学園の中でも年長者を中心とした人々で構成されたものであったと言える。

（2）ソフィストとの違い

アカデメイアとリュケイオンに共通するソフィストの違いは、授業料、学問の自由の2点である。

まず授業料について述べる。ソフィストは前述したように、自己の生活を支えるために、生徒から高額の授業料を取り、生徒の求めに応じた教育を行っていた。それに対し、アカデメイアおよびリュケイオンでは、基本的には無償であった⁴⁴⁾。しかし生活費は自己負担であった。アテナイ市民であれば、土地を持っているので生活にはさほど困らなかつたであろうが、アテナイ以外の土地からやって来た者は、居住費を含めた一切の生活費を賄えるだけの経済力が必要であった。リュケイオンにはみられないものの、アカデメイアでは苦学生の例も見られる⁴⁵⁾が、数は少なかったようである。こういった点から Lynch (1972) は、アカデメイアやリュケイオンの学生が経済面ではある程度の経済的余裕のある者が大半を占めていたとする⁴⁶⁾。確かに両学園において、シュンポシオンを定期的に行っていたことや、学生の多くが非市民であるにも拘らず数年間の勉学に励めたことを踏まえると、ある程度の財力を持っている子弟が多かつたと考える。

次に学問の自由の点について述べる。この学問の自由には、学問に対する考え方といった教義上の面と、就学年数といった組織上の面を含む。学問に関する見方は、アカデメイアにおいてもリュケイオンにおいても、学長の考えが全てではなかつた。例えば、アリストテレスがアカデメイア時代から、プラトンの軽視していた生物学の研究を行っていたことから明らかである。また、学園への入学に際して、社会的な身分や哲学的な背景を問われることはなかつた。リュケイオンの第2代学長のテオフラストスは、エレスイオスのアルキッポスの弟子になり、その後アカデメイアで学んだ後に、リュケイオンでの研究を経て、アリストテレスの後継者となった。後継者にも拘らず、テフラストスは自身の著作の中で、アリストテレスの論を批判している。このようなかつての師匠に対する批判は、以前にアリストテレスがプラトンに対して行っており、何ら新しいことではなかつた。むしろ学問を深める上での批判は、必要なことであつた。

就学年数については、アリストテレスがアカデメイアに20年近く通つていたことから、特別

に決められていなかったことが分かる。またリュケイオンにおいても、アカデメイアと同様であった。つまり、学生の意思と生活費が続く限りは学園での研究に勤しむことができた。しかし、哲学を究めようとするならば、ある程度の年数をかける必要があったと考えられる。

(3) 強力な資金援助

リュケイオン、アカデメイア共に、授業料は取らなかったが、それぞれ強力な資金源を持っていた。

アカデメイアでは、初代のプラトンの時にはシチリアのディオニュシオス2世が援助していた。また、アカデメイアの近くに小さな土地を購入した際の費用は、アンニクリス⁴⁷⁾が負担した。プラトンはかなりの名門に家に生まれたが、資産家であったかについては否定的な見方もある⁴⁸⁾。だが、学園の運営にシチリアからの援助を当てたりはせず、もっぱら自分の分にしか使わなかったといわれる。第3代学長のクセノクラテスは、マケドニアからの贈り物があったにも拘らず、それらをあまり受け取ろうとしなかったといわれる⁴⁹⁾。一般に、アカデメイアでは資金援助があった場合、個人的に受け取ることはあっても、学園の運営資金に回すことはなかったようである。

リュケイオンでは、初代学長のアリストテレス、第2代学長のテオフラストスの時代を通じて、マケドニアのアレクサンドロスや摂政のアンティパトロスから多額の援助を受けていた。アレクサンドロスは、図書や資料を収集するための資金としてアリストテレスに800タラントンの金額を送ったといわれる⁵⁰⁾。このことから分かるように、リュケイオンではマケドニアからの資金を学園の研究費に当てていた。

このようにそれぞれの学園で、資金運用方法は異なるもののアテナイ以外からも資金援助であった点で共通している。これは、リュケイオン、アカデメイアそれぞれの学園の名声、学長への信望が広範囲にわたって知られていたことの表れと言える。また、プラトンとシチリアのディオオン、アリストテレスとアレクサンドロスといった師弟関係から、彼らの地道な教育活動が結果としてそれぞれの生活や学園を支える形となった。

第3節 リュケイオンとアカデメイアの相違点

(1) 重視した学問と施設の規模

リュケイオンがアカデメイア同様、哲学を重視したのは前述したとおりであるが、それを支える学問の点で異なった考えがみられる。また、その教育方針によって施設規模の面でも違いが生じることになった。

哲学以外で重視された学問として、アカデメイアにおいては数学を、リュケイオンにおいては修辞学や生物学を挙げることができる。アカデメイアにおける数学は、当時のギリシア世界の中でも第一級であったが、あくまでも哲学を究めるために必要な知性を訓練するための予備学問であった。他方リュケイオンでは、アカデメイアでは重視されなかった修辞学や生物学を重んじた。アカデメイア在学中から、アリストテレスは修辞学や生物学といった実践的・経験的な学問を研究していた。修辞学を重視した背景には、イソクラテスの修辞学校⁵¹⁾やソフィストの活躍があった。また生物学を重視したのは、アリストテレスの家系が代々医者であったことや、調査などの実践的な教育を論じていることに由来すると考えられる。

このように、アカデメイアが数学などの理論的な学問を重視したのに対し、リュケイオンでは経

験的な学問を重視した。この違いは施設の面にも影響を及ぼした。アカデメイアは、数学や哲学といった学問を中心に行っていたので、学習教材もほとんど必要がなく、設備も最小限でよかった。また、ギムナシオンに収まりきれない著書や資料は、隣接するプラトンの私邸に保管することができた。他方リュケイオンは、生物学を重視したことからも明らかなように、資料や標本が多数収集されたので、その保管場所が必要であった。そのために、年々学園の規模は大きくならざるを得なかった。ところがリュケイオンは、その多くが非市民であったため、少なくともアリストテレスが学長の時代には、私邸を建てることもできなかった。ギムナシオン内に入り切れない資料等は、近隣に借家に保管したであろう。また敵に包囲されたときに、資料が多い点でリュケイオンの方が損害も大きかった。

（2）市民と非市民

リュケイオンとアカデメイアでは、それぞれの学園の顔である学長の社会的な身分も異なっていた。また、それに関連して財産に対する考えや不動産所持でも相容れない部分が生じた。

まず、それぞれの学園における学長は、正確な証拠はないものの選出方法は幾分異なっていたようである。Wilamowitz (1881) は、リュケイオンの選出方法を僭主的とし、アカデメイアを民主的とした⁵²⁾。これは、リュケイオンでは前学長が後任者を指名する形をとっていたのに対し、アカデメイアが学生による選挙によって決定したという点に由来する。しかしアカデメイアにおいて、プラトンの死後、甥のスペウシッポスが継いだ際に、選挙が行われたかは不明である。また、リュケイオンでも前学長の遺書に従って、選挙によって学長を選出した例もある⁵³⁾。したがって、学長選出が両学園で完全に相反する形をとっていたとは言い難い。いずれの学園においても、学長になるには、研究を地道に続けることができかつ学園を最も発展させることができる人物であることが重要であった。

ところが、選出方法は異なるものの学長のアテナイにおける社会的身分については、リュケイオンとアカデメイアでは明らかに違いがみられる。特に、両学園の初代から第4代までを比較すると、アカデメイアでは第3代のクセノクラテスを除いて他の3人はアテナイ市民である。だが、リュケイオンでは4人全員がアテナイ以外の出身者である。

この差は不動産所持にもかかわる問題であった。アカデメイアは初代学長のプラトンがアカデメイアの傍に私邸を所持していたために、不動産を所持できる市民身分の者が必要であった。プラトンには子どもがなかったので、甥のスペウシッポスが不動産相続するのは、当時のアテナイにおける相続の面からいってもごく自然のことであった。他方リュケイオンの学長は非市民身分であったので、基本的には不動産所持はできなかった。学園の性格上、リュケイオンは施設も大規模なものを必要としたので、不動産所有は学園運営の面で大きな問題となっていく。

また財産全般に関しても、それぞれの初代学長の作品からも全く異なる考えを持っていたことが窺える。プラトンは『国家』にもみられるように、一種の共産主義的な考えを持っていた。このことが完全に学園内部でも行われていたとはいいがたいが、『第7書簡』においても学長や学生が生活を共にすることを重んじていた⁵⁴⁾ことが書かれているので、少なからず共同生活が行われていたと言える。しかし、アリストテレスはある程度の財産所有を立派な生活を送る上での必要不可欠な条件としている。この考えは、リュケイオンでのシュンポシオンがアカデメイアよりも贅沢なものであったことにも表れている。

両学園共に自由な学風で学長の考えが絶対的なものでなかったが、学長の社会的身分の差は少なからず学園のあり方に影響を及ぼしていたと考える。

(3) 教授法と文章形式

リュケイオンとアカデメイアにおける教授法や文章形式は、初心者に対する配慮の点で大きく異なる。特にアリストテレスとプラトンに対象を絞って述べる。

まず教授法であるが、プラトンはソクラテス以来の対話形式を用いた、少人数制の講義形式であった。アカデメイアでは前述したように、数学がさかんであり、入学時には少なくとも数学の知識を持っていることが前提であったことから、ある程度の基礎学力を持った人物でないと、学園での生活が成り立たなかったと言える。プラトンはある程度の知識を持った学生を相手にしていたので、初心者に対する教育配慮を全く考えていなかった。このことは、「善について」というプラトンが唯一アテナイ市民向けに行った講義からも明らかである。アテナイ市民たちはこの講義で幸福を理解できると期待していたが、実際には数学や幾何学、天文学に関する講義であったので、期待が外れてがっかりしたという⁵⁵⁾。

アリストテレスはこのプラトンの講義を目の当たりにし、ガイダンスの重要性を悟った。そこでリュケイオンにおける講義では、初心者や市民向けの講義や図表や絵を活用するなどして、哲学に入る前の予備知識の育成にも力を注いだ。

次に文章形式であるが、これはそれぞれの学園で行われた講義スタイルに通じる。プラトンの著作は対話形式で書かれているのに対し、アリストテレスの著作は散文形式である。対話形式の文章は、創造力や芸術的な才能が必要であり、一度完成したものを後世の弟子たちが書き換えることは困難である。だが、散文形式のほうは、その後の研究の結果や業績を書き加えることは容易である。また、研究に基づく具体例を取り入れており、初心者が理解しやすいように文章の面でも工夫が施されている。

そして書物についてであるが、リュケイオンのほうがアカデメイアに比べて、重要性を見出した。それは膨大な資料や標本の分類の必要性があったことからや、アリストテレス自身が講義用ノートを作成したことから窺い知ることができる。したがって、学園が所持する書物の相続は重要な問題であった。しかし、リュケイオンの第3代学長であるストラトンは書物を相続していなかったため、その後の学園の発展に支障をきたした。

以上のことから、アリストテレスはプラトンの教授法に改良を加え、学ぶ者の側にたった教育方法を発展させたと言える。

第4節 リュケイオンの性格

(1) 実践学の重視

リュケイオンでは前述したように、哲学を最高学問としながらも修辞学や生物学といった実践的な学問も重んじた。アリストテレスは、このような学問の研究をアカデメイア在学中から行っていた。したがって、リュケイオン開校時にはそれまでの研究成果と方法が確立していたものと考えられる。また修辞学についても、アリストテレスは、ソフィストやイソクラテスの学校の人気を直視し、その必要性を十分に考慮した。その結果、特に市民向けの講義の中で論じられることになった。

こういった実践的な学問にはそれに伴う資金がかかる。だが、リュケイオンはこの問題もマケド

ニアからの援助によって乗り越えることができた。マケドニアからの資金援助は当時としてはかなり高額なものであったが、これを全て学園の研究費につぎ込むことができたのは、学園が公共施設を利用していたためである。また藤縄（1985）は、リュケイオンの学生に苦学生の例が見当たらないことから、この学園に通っていた者は経済的には余裕のあったものが多いとしている⁵⁶⁾。学生が自らの生活費を賄うことができたことも実践的な学問を発展させる要因の1つであった。

リュケイオンでは、修辞学などの実践的な学問の教育を行ったにも拘らず、アテナイで政治家をほとんど輩出しなかった⁵⁷⁾。つまり、実践的な学問を重視するとはいっても、あくまでも哲学を究めるための教育の一環として行うものであった。

（2）市民教育の充実

市民向けの入門的な講義は午後に行われ、実践的な研究を基にした教育がリュケイオンの学長をはじめ、年長学生によって交代で行われた。市民という、哲学を学ぶ上では初心者とも言える人々に対する教育は、アカデメイアには欠けていた部分であった。それをアリストテレスは教授法を改善することで、見事にこの問題を克服した。プラトンもアリストテレスも当時の政治腐敗を問題視して、政治のあり方を論じた。この政治を行う市民を教育した点で、リュケイオンの方がアカデメイアよりも実社会と向き合い、現状を改善しようとする意欲に満ちていた。

また、市民からの反響も大きく、アリストテレスの時代だけでなくその後も開講されていた。リュケイオンにとっては、学園の良いアピールの場でもあった。

（3）自由な校風

リュケイオンは、アカデメイアに見られる学問の自由に加えて、個人を重んじたところに特徴がある。これはアリストテレス自身、プラトンの共産主義を批判し、1人1人が自己を確立することを目指した点にも表れている。リュケイオンの学生はアカデメイアよりも、学長を含め全員が対等な立場にあった。また、哲学の知識過程が個人の貢献と役割分業から累積的な結果として達成されるものとみなしていた。こういった点から、リュケイオンでは学生の能力を見込み、各個人が役割を分業して学園の運営や研究を行っていた。

加えてリュケイオンの学生は、多くがアテナイ出身者ではなかった。そのためにアテナイ社会での立場は弱かったが、さまざまな考え方がぶつかり合い、結果としてより豊かな知識体系を創りあげることになった。

以上から、リュケイオンはアカデメイアからの影響を受けながらも、当時の社会状況をうまく合致した、新しいタイプの学園であったと言える。また、この学園を支え存続させたのは、非市民身分のリュケイオンの学生たちと、聴講生として午後の講義を受けたアテナイ市民であった。

第3章 アテナイにおけるリュケイオン

第1節 学術面の功績

（1）後世への影響

リュケイオンが学術面で後世に与えた影響は、膨大な資料収集とそれに伴う学問の分類である。

まず資料収集は、マケドニアからの資金を用い、リュケイオンの学生によって行われた。集められた資料を基に研究が行われ、編纂された。ストラボンによると、アリストテレスはリュケイ

オンに構造的で利用しやすい図書館を創った⁵⁸⁾とある。また、アリストテレスならびにテオフラストスの遺言書の中で、凶書の寄贈者を指定している⁵⁹⁾。資料を集めるだけでなく、それを分析して書物にして後世に残したことで、後の研究者たちの道標となった。

これらの書物は前章でも述べたように、伝統的な対話形式でなく散文形式で書かれた。これは、講義録として作成されたためである。だが凶書を保管していた点を踏まえると、いかなる人物でも理解しやすいような工夫として、散文による文章にした。そして必要に応じて書物に修正を加え、分類作業が行われた。この編集作業はアリストテレスの手によるものではなかった。また、現存しているアリストテレスの書名でさえも、本人によるものが少ない。これらのことから、現存しているアリストテレスの著作が、彼の死後も大事に保管され、内容に応じて分類されたことが分かる。

アリストテレスの著作物が、いまだに多くの分野で研究されていることを考えると、リュケイオンがこれらの書物を後世に伝えたことの意義は大きい。また、政治学、倫理学といった学問の分類も、その内容は多少異なるにしても現在まで受け継がれているという点も見逃すことはできない。アリストテレスの名で現存している書物の裏には、多くのリュケイオンの学生たちが資料を集め、書物を保管し、必要に応じて修正を加え、編纂するといった地道な努力が隠されている。

(2) 市民教育への貢献

リュケイオンの社会への学術的な貢献としては、市民向けの午後の講義である。

この講義では市民が理解しやすいように、より入門的で実生活に近い内容が扱われ、必要に応じて図表なども活用した。また、公共施設で行っているために聴講しやすく、しかもソフィストのように授業料も徴収しなかった。このような充実した教育を市民に提供できたのは、ソフィストと異なり、学園としての取り組みであったためである。つまり、マケドニアからかなりの資金提供が行われたことや、十分な研究を行えるだけの人材が存在したことが背景にある。

元来リュケイオンは、アカデメイア同様に哲学を主にする学園であり、学園外の市民に対する教育を行う必要性はなかった。つまり、哲学等の学問に携われるだけの基礎的な能力を備えていることが前提であった。そのため、アカデメイアでは市民に対する講座を開講する考慮はなされなかった。しかし、リュケイオンでは学園内部の学生に対しても、学問研究に入る前の基礎を重視した。この点から、リュケイオンではそれまでの学園で行わなかった市民教育の分野に着手した。

この講義が午後に行われたことに、リュケイオンの市民に対する配慮と思惑が窺える。まず、一般的に市民は午前中に公務を済ませ、午後に自由な時間を有していた。この午後の時間にギムナシオンに出かけ、運動や友人たちと歓談に費やした⁶⁰⁾。こういった市民の生活スタイルとリュケイオンのギムナシオンとしての性格を考慮して、午後の時間が市民向けに当てられたと考えられる。さらに、リュケイオンの学生の多くが非市民であったので、午前中に学内向け講義が行えたことも要因の1つである。講義内容もさることながら、時間的な配慮が多く市民をひきつけた。

他方で、市民の生活を考慮してまで講座を開いた背景には、リュケイオン特有の問題があったと考える。それは第1章でも述べたマケドニアとの関係である。アテナイ社会において、学園の構成員の大半が非市民身分の時点で不利であるのに加え、マケドニアからの資金援助を受けた学園であったために、状況次第では市民からの非難は大きかった。したがって、市民に学園の一部の情報を開示することによって、市民の間にリュケイオンの存在意義を植えつけようとする意図があったと

しても想像に難くない。

（3）哲学の中心地

リュケイオンが学術の面で果たした第3の功績は、アテナイを確固たる哲学の中心にしたことである。

マケクニー（1989）は、哲学者は移動型の技能者として各地を遍歴する者であったが、プラトンやアリストテレス以降、哲学を学ぶ側が移動せざるを得なくなったとする⁶¹⁾。確かに、アカデメイアやリュケイオンの名声は、アテナイ内部にとどまらず各ポリスに及び、その結果多くの哲学を学ぼうとする者がアテナイに集まってきた。しかも、両学園ともに何代にもわたり同じ場所で教育を施したことや、学園の教育環境も内容も充実していたために、アテナイが哲学を学ぶ者にとっての憧れの地となった。

また、リュケイオンはアカデメイアと性格が異なる学園であったので、哲学を学ぶ者にとって選択の幅を広げたと言える。しかも、リュケイオンの学生が他の学校に重複して通うことも可能だった⁶²⁾。入学試験も卒業試験もなかったため、本人の意識に応じてその内容や研究機関を選択することができた。

アテナイが哲学の中心地となったのは、リュケイオンだけでなく、アカデメイアから築き上げてきた結果である。しかし、その地位を強化し選択の幅を拡大した点で、リュケイオンの果たした役割を見逃すことはできない。

第2節 社会的地位の確立

（1）紀元前306年の事件

紀元前307年、アンティゴノスの子デメトリウス・ポリオルケテスがアテナイを包囲し、リュケイオンと関係の深かったファレロンのデメトリウスはアレクサンドリアへ逃れた。これによって、リュケイオンはさまざまな事件に巻き込まれることとなった。

まずリュケイオンに限った問題としては、テオフラストスの弟子であった詩人のメナンドロスが、ファレロンのデメトリウスの友人という理由だけで訴えられる事件が起こった⁶³⁾。

次に哲学者全体に広がった問題としては、反マケドニア派であったデモステネスの甥のデモカレスが、哲学者の学園運営を禁止する法律を施行させようと試みたとされる⁶⁴⁾。

しかし、古代の史料から実際に施行された哲学者の学園運営禁止法は、紀元前306年に出されたスニオンのソフォクレスの法律である。その内容は以下の通りである。

…いかなる哲学者も評議会および民会の承認なしに、学園を開くことはできない。これに違反すれば、死刑に処す⁶⁵⁾。

…アンフィクレイデスの息子であるスニオンのソフォクレスが提示した哲学者に対する禁止された法律がある。この場合、哲学者に対して法律を發布したので、いかなる哲学者も学園を設立できないこととなった⁶⁶⁾。

これらの史料から、ソフォクレスはリュケイオンだけでなく、アカデメイアやストア派なども含めたあらゆる哲学者を攻撃的としたことが明らかである。いずれにせよ、テオフラストスは他の哲学者同様に、難を逃れるためにアテナイを一時離れた。

この法律は1年も経たない間に、思わぬ形で破棄されることとなった。それは、アリストテ

レスの弟子であったフィロンが、ソフォクレスの法律を違法だとして提訴したことに始まる⁶⁷⁾。この訴えに対して、アテナイ市民は法律の撤廃を要求したばかりか、ソフォクレスに5タラントンという多額の罰金を課した。その結果、哲学者たちは以前のようにアテナイに戻り、学園を再興することができるようになった。勿論テオフラストスもアテナイに復帰し、精力的に教育活動を行った。

(2) 紀元前306年の事件が示すもの

リュケイオンがマケドニアとの関係が深く、その政治動向次第では幾度も危機に立たされたことは、アリストテレスの生涯においてもテオフラストスの時代においても変わらなかった。しかし、上記の紀元前306年の事件は、リュケイオンとアテナイ市民の関係に、それまでとは異なる新たな一面を垣間見せることとなった。

まず、リュケイオンがこの事件を乗り越えることができた理由として、テオフラストス自身の人気を挙げられる⁶⁸⁾。確かに、テオフラストス個人の力量もあるだろう。それは、ファレロンがテオフラストス個人を攻撃したのではなく、哲学者全体を攻撃の対象としたことから明らかである。しかしアテナイ市民のねらいは、テオフラストスをアテナイに呼び戻すだけでなく、リュケイオンの再興を企図したものであった。そうでなければ、哲学者の学園開設の法律を破棄するまでには及ばないだろう。

また、上記の裁判の原告がアリストテレスの弟子のフィロンであったことも、リュケイオン再興について企図したことを暗示する。アテナイの裁判では、原告・被告ともに自らの言葉で正当性を陪審員に訴える。フィロンは、リュケイオンがティアソス（宗教結社）としての法的地位を保持しており⁶⁹⁾、その機能を禁じることは不当だとしている⁷⁰⁾。法的地位の問題はさておき、この内容がテオフラストスではなく、リュケイオンの正当性を訴えたことに意義を見出せる。すなわち、この訴えが通ったのは、アテナイ市民が少なからずリュケイオンを必要な機関として認めていたことの表れと言えるのである。

リュケイオンで学んだ者だけでなく一般のアテナイ市民もがこのように重要視したのは、ひとえにテオフラストスの人気だけではなく、それまでの学園の教育方針にあった。特に、前述したように実践的な研究を基にした一般市民向けの講義は、多大な効果を生んだであろう。この講義では、内容・教授方法などに工夫が施されていた。アテナイに住んでいる者にとって、リュケイオンのこういった教育サービスは、非常に役立つものであったろう。だからこそ、ファレロンの法律はアテナイ市民にとっても、リュケイオンの関係者同様に不適切な法と見なされたと言える。

さらに、テオフラストス時代においてもアテナイはいまだに文化の中心であり、市民もこの地位を維持したいと望んだと考えられる。

哲学者やソフィストたちがアテナイで活動する上でのプラス面は、生徒やそれに伴う各地の情報が収集しやすい点と、教育自体に対するポリスの規制がないためにある程度の自由が約束される点である。しかし、ポリスが関与しなかったためにポリスからの資金援助はなかった。そのため、より研究費がかかる実践的な学問を行うには、アテナイ内外を問わず、裕福な資金源を探す必要があった。この点がアテナイの弱点であり、この後に強力な資金を有するアレクサンドリアに、文化の中心を奪われる結果となった要因であった。

アテナイ市民にとっては、ペロポネソス戦争以降失った政治の中心を文化の中心として補うこと

で、他のポリスに対する一種の優越感を誇示した。また、諸地域から生徒が集まってくることに伴い、各地の情報が入手しやすいという利点もあった。その反面、哲学者やソフィストの教育次第では市民が扇動され、その結果政治の混乱を招く危険性があった。ポリスにとって有害な者と見なされた場合は、アリストテレスやテオフラストスも疑いをかけられたように、不敬罪などの名目をつけて訴訟を起こし、国外追放にするなどの策が講じられた。

このように、哲学者は相対的には弱い立場にあり、それはソクラテス時代から変わらないことでもあった。それに加え、リュケイオンの学長や生徒の多くは非市民という社会的身分においても弱者であった。したがって、アリストテレスもテオフラストスもアテナイで学園を維持していくには、ある程度市民に対して学園を開示する必要があった。また、それによって市民の学園に対する同意と愛着を獲得することが、存続していく上での社会基盤となっていた。

以上のことから紀元前306年に起こった事件は、リュケイオンがアテナイにおいて長年の市民教育を通じて築き上げてきた、教育の場として揺ぎ無い地位を示すものであった。しかも、この社会的に認められた根底にはポリスのよる法的な保護が一切無かった点も注目すべきである。

おわりに

本研究の目的は、アリストテレスおよびテオフラストス時代のリュケイオンに焦点を当て、この学園がアテナイ社会に果たした役割を考察し、古代ギリシアにおける教育と社会との関連性を導き出すことであった。そこで、イェーガー以降のアリストテレスに対する研究動向を踏まえた上で、アカデメイアとの比較検討を行い、リュケイオンの性格を検証した。

その結果、次の3点が明らかになった。第1に、アリストテレスはアカデメイア在学中からプラトンとは異なる意見を有していた点である。第2に、リュケイオンはアカデメイアと制度上の面では似ているが、教授法や学生の社会身分といった学園内部の面ではかなり異なっている点である。第3に、リュケイオンは実践学、市民教育に力点をおいた、自由で個人の能力を重視した学園であった点である。

また、リュケイオンがアテナイ社会に果たした役割を学術の面と社会的地位の面から考察した結果、次の3点も明らかになった。第1に、膨大な資料を収集・分類し、後世に伝えた点である。第2に、アテナイが哲学の中心地になる一端を担い、各地の学問を志す人々をアテナイに集めた反面、市民に対しても講座を開講するといった、内外に開かれた学園という点である。第3に、紀元前306年の事件を検証し、アテナイの中でリュケイオンが教育の場として確固たる地位を築き上げたことが明確になった点である。

以上のことから、アリストテレスおよびテオフラストス時代のリュケイオンは、アカデメイアの伝統的な哲学の為の学園としての性格と、当時隆盛を誇っていたソフィストやイソクラテスの学校の実学重視としての性格の長所を織り交ぜた学園であったことが明らかになった。このリュケイオンの学園の性格は、アリストテレスが唱える「中庸」を教育現場で形にしたものだと言える。アリストテレスが、アテナイでは非市民として社会的には弱者の立場にあったこと、さらにマケドニアとの関係上、常に社会情勢に敏感であり続けざるをえなかったことが、上記のリュケイオンの学園の性格に影響を及ぼした。

紀元前4世紀のアテナイでは、政治面でも社会組織面でもそれまでの市民共同体としてのあり方に大きな変化が生じた。そのような激動の時代の中で、リュケイオンはそれまでの哲学者の学園としての伝統に、社会の求める教育をうまく取り入れることに成功した。それはアリストテレスをはじめとする学園の構成員の多くが、非市民であったところに起因する。非市民ゆえの冷静な見方が、それまでの教育のあり方に大きな進歩を加えた。

アテナイでは教育は公共機関によって行われることはなかったが、リュケイオンはポリスによる法的な保護なしに、自らの教育実践によってアテナイ市民に受け入れられた。それが、この学園の存続を支える基盤でもあった。このことから、教育を行うにあたってその背景にある社会との関係を無視することはできないものであったと言える。

注

- 1) 藤縄謙三(1985)：『ギリシア文化の創造者たち 社会史的考察』、筑摩書房、pp. 93-212.
- 2) 廣川洋一(1980)：『プラトンの学園アカデメイア』、講談社。
- 3) 廣川洋一(1984)：『イソクラテスの修辞学校 —西欧的教養の源泉—』、岩波書店。
- 4) Lynch, J. P. (1972) : *Aristotle's School A Study of A Greek Educational Institution*, California U. P.
- 5) イェーガー, W. (1961)・野町啓訳(1964)：『初期キリスト教とパイデア』、筑摩書房、p. 174.
- 6) バーニェト, M. F. (1980)・神崎繁訳(1986)：「アリストテレスと善き人への学び」、井上忠・山本巍編『ギリシア哲学の最前線』、東京大学出版会、pp. 86-132.
- 7) プルタルコスによれば、フィリッポス2世は、学問・研究の場を用意したとある。プルタルコス・村川堅太郎編(1966)：『プルタルコス』(世界古典文学全集第23巻)、筑摩書房。(以下、Plut.), p. 182 上段.
- 8) Plut., p. 182 下段.
- 9) 同盟市戦争は、キオス、ロドス、コス、ビュザンティオンが第2次海上同盟から離脱したことに始まった戦争である。離脱した諸市はアテナイが再び帝国化することを恐れていた。この戦争によって、同盟は解体し、戦争に敗北したアテナイは、その後、ギリシアで覇権を取ることはなかった。
- 10) 澤田典子(1993)：「フィリッポス二世の対ギリシア政策 —「フィロクラテスの和約」をめぐる—」、『史学雑誌』、第102編第7号、pp. 1-41.
- 11) 当時のギリシアは地域により格差はあるものの、自給自足の面でもマケドニアに比べ、決して豊かな土地ではなかった。フィリッポスが少年時代にスパルタの覇権を目の当たりにしたこと、エパミノンドス時代のテーベに人質として滞在していた経験を挙げ、ギリシアにおける覇権獲得を目指したことや、オリュンピア祭典への参加等からもギリシア人への憧れを抱いていたこと根拠として提示している。
- 12) 藤縄(1985)、pp. 183-184.
- 13) Diogenes Lartius・Hicks, R. D. (trans.) (1925) : *Lives of Eminent Philosophers I*, Cambridge (以下、D. L. 1), pp. 452-459.
- 14) アテナイでは、他のポリス出身者を在留外人(メトイコス)と外人(クセノス)の2つに分類していた。在留外人は1ヶ月以上アテナイに滞在し、人頭税を納めている者を指す。他方、外人は1ヶ月未満

の短期滞在者を指した。

- 15) 不動産所有は認められなかったものの、動産所有とその相続は認められていた。したがって、アリストテレスの作品やその財産相続は可能であった。
- 16) 馬場恵二(1962):「アッティカにおける非市民の不動産所有」,『史学雑誌』,第71編第8号,pp.1-35.
- 17) この人物は、第3章で登場するファレロンのデメトリウスと同一人物である。
- 18) D. L. 1, pp. 484-487.
- 19) Lynch(1972), pp. 101-102.
- 20) Jaeger(1923)・Robinson, R. (trans.) (1962):*Aristotle: Fundamentals of the History*, Oxford.
- 21) Düring(1965):” Aristotle and Plato in the Mid-fourth Century “, *Eranos*, 54, Göteborg, pp. 109-120.
- 22) 廣川(1980), pp. 225-227.
- 23) プラトンはシチリアに3度の旅行に出かけており、第1回は紀元前387年に訪れている。
- 24) 紀元前367年から紀元前348/7年の間に、プラトンがアカデメイアにいたのは、第2回シチリア旅行から第3回シチリア旅行の間の5年間、第3回シチリア旅行から戻ってきてから死去するまでの3年間である。学園の講義や執筆に集中したのは、第3回の旅行の後になってからであった。
- 25) エウドクソスは、アカデメイアで学ぶ以前に、幾何学と医学を既に修得していた(堀田彰(1968):『アリストテレス』(人と思想6),清水書院,pp.16-17.)。『ニコマコス倫理学』のなかで、エウドクソスの説の卓越性を認め、また、節制的な人であると、人格の面も賞賛している(アリストテレス・加藤信朗訳(1973):『ニコマコス倫理学』(アリストテレス全集13),岩波書店,p.324.)
- 27) D. L. 1, pp. 444-445.
- 28) Aeliani, C.・Dilts, M. R. (ed.) (1974):*Varia Historia*, Leipzig, pp. 50-52.
- 29) 中野幸次(1967):『プラトン』(人と思想5),清水書院,pp.91-92.
- 30) D. L. 1, pp. 380-381.
- 31) Düring(1965), pp. 109-120.
- 32) 廣川(1980), pp. 234-235.
- 33) 前掲書, pp. 235-236.
- 34) 前掲書, pp. 235-236, ;堀田(1968), p. 24.
- 35) 廣川(1980), p. 235.
- 36) Düring(1957):*Aristotle in the Ancient Biographical Tradition*, Göteborg, p. 101.
- 37) D. L. 1, pp. 444-447.
- 38) Lynch(1972), p. 73.
- 39) アカデメイアはその付近に、プラトンの私邸が建てられ、そこも施設の一部として活用していたようであるが、補助的な役割であった。
- 40) Lynch(1972), p. 83.
- 41) リュケイオンの第4代学長であるリュコンの頃に行われたシュンポシオンは、贅沢で華美なものであったため、多くの人々が出費を恐れて学園参加を断念した(Athenaeus・Gulick, C. B. (ed.) (1933):*The Deipnosophists V*, Cambridge, pp. 480-485.)。
- 42) アリストテレス・牛田徳子訳(2001):『政治学』(西洋古典叢書),京都大学出版会,pp.399-400.

- 43) アテナイオス・柳沼重剛訳 (1997) : 『食卓の賢人たち 1』 (西洋史古典叢書), 京都大学学術出版会, p. 18.
- 44) リュケイオンについては, 明確な証拠はないが, Lynch(1972)に従い, 授業料がなかったと考える (Lynch(1972), p. 83.). また, アカデメイアの第 2 代学長のスペウシッポスは授業料を取り, 非難された。
- 45) アテナイオス・柳沼重剛訳 (1998) : 『食卓の賢人たち 2』 (西洋史古典叢書), 京都大学学術出版会, pp. 126-127.
- 46) Lynch(1972), p. 83.
- 47) アンニクリスは, プラトンが最初にシチリアを訪問した際, ディオニュシオス 1 世の怒りを買い, アイギナ島に奴隷として売られそうになったところを助けた人物である。
- 48) プラトンが資産家であったかについて, Wilamowitz(1881) は肯定的であるが (Wilamowitz-Moellendorf, U, V(1881) : *Antigonos von Karystos*, Berlin.), 古代の伝承は否定的なものが多く, 藤縄(1985)はペロポネソス戦争で大きな被害を受けた可能性を挙げ, 否定的な見方をしている (藤縄(1985), pp. 149-150.)。
- 49) クセノクラテスは, アレクサンドロスから多額の資金を贈与されたが, 3000 ドラクメだけ受け取り, 残りは返金したという (D. L. 1, pp. 382-383.)。
- 50) 800 タラントンは, 当時としては最高額の贈与といわれる (藤縄(1985), p. 171)。ちなみに, 紀元前 4 世紀のアテナイでは, 1 年間の生活費は最低限で 250 から 300 ドラクメほどで十分暮らすことができた (前沢伸行(1998) : 『ポリス社会に生きる』 (世界史リブレット 2), 山川出版社, pp. 36-37.)。また, クセノクラテスが受け取った額の 1800 倍に相当することからも, 非常に高額であったことが分かる。
- 51) イソクラテスの学校は, 1000 ドラクメの授業料にも拘らず, 100 人もの弟子を抱えていた (廣川洋一(1984) : 『イソクラテスの修辞学校 — 西欧的教養の源泉 —』, 岩波書店)。
- 52) Wilamowitz(1881), p. 284.
- 53) 第 2 代のテオフラストスや第 4 代のリュコンは選挙で次の学長を決定するよう指示した。その選挙で選ばれた次の学長は必ずしも前学長の一番弟子とは限らなかった。
- 54) Plato・Harward, J. (trans.) (1976) : *The Platonic Epistles*, New York, p. 135.
- 55) Aristoxenou・Macran, H. S. (trans.) (1902) : *Aristoxenou Harmonika Stoicheia*, Oxford, pp. 122-124.
- 56) 藤縄(1985), pp. 173-178.
- 57) 例外は, 次章で述べるデメトリウスである。元来, リュケイオンの学生に, アテナイ出身者が少ない点も政治家が生まれにくかった原因でもある。
- 58) Strabo・Jones, H. L. (trans.) (1929) : *The Geography of Strabo VI*, Cambridge, pp. 108-113.
- 59) D. L. 1, pp. 446-449, pp. 502-509.
- 60) マハフィー, J. P. (1896)・遠藤光, 遠藤輝代訳(1991) : 『古代ギリシア人の生活文化』, 八潮出版, pp. 40-43.
- 61) マケクニー, P. (1989)・向山宏訳(1995) : 『都市国家のアイトサイダー—ポリスから古代帝国へ—』 (MINERVA 西洋史ライブラリー③), ミネルヴァ書房, p. 187.

- 62) Lynch(1972), p. 72. 例えば, オルビア出身のピオンは, アカデメイアの第5代学長のクラテスの教授法を好まず, リュケイオンのテオフラストスのもとに学びにやってきた(D. L. 1, pp. 428-431.).
- 63) D. L. 1, pp. 530-531.
- 64) Athenaeus・Gulick, C. B. (ed.) (1937): *The Deipnosophists* VI, Cambridge(以下 Athen.), pp. 286-289.
- 65) D. L. 1, pp. 484-485.
- 66) Lynch(1972), p. 104.
- 67) Athen., pp. 290-291.
- 68) Lynch(1972), p. 104. また, テオフラストスの人気が高かったことは, 生徒が2000人近くいたことや, アグロニデスがテオフラストスを不敬罪で訴えたが, その人気によって罰せられなかったことからも知ることが出来る(D. L. 1, pp. 482-485.).
- 69) リュケイオンがティアソスであったという説は, 19世紀末の古典文献学者である Wilamowitz 以来有力であったが, 近年の研究では否定されている。
- 70) Wilamowitz(1881), pp. 270-272.

[本論文は, 平成14年度に坂本千春が茨城大学大学院教育学研究科に提出した修士論文に関わる研究の一部を承けて, 更に補筆修正を施したものである。]